

強い推意／弱い推意と「雨のなかの猫」

内 田 聖 二*

Strong/Weak Implicature and ‘Cat in the Rain’

Seiji UCHIDA

要 旨

Ernest Hemingwayの短編、‘Cat in the Rain’は文学、語学双方で様々な観点から分析されてきたが、その論点のひとつに、「雨のなかテーブルの下にうずくまっていた猫」と最後にメイドがもってきた「大きな三毛猫」が同じ猫であるか否かの問題がある。本稿では三毛猫の生理学的特徴を考えることでその議論に新しい視座をもたらすとともに、関連性理論の知見のひとつ、推意の強弱という概念を援用することで猫の同定にかかわるテキスト解釈にも示唆するところがあることを考察するものである。

1 はじめに

認知語用論としての関連性理論 (relevance theory)¹⁾はその射程が広いことが特徴のひとつとなっている。すなわち、その分析対象は言語コミュニケーションのみならず非言語コミュニケーションにもわたり、言語コミュニケーションでは話しことば、書きことばを区別することなく統一的に説明でき、さらに、書きことばではexpositoryなテキストだけではなく文学テキストもその守備範囲に入る。

一方、ヘミングウェイの短編「雨のなかの猫 (Cat in the Rain)」はヘミングウェイの最大傑作ではないかといわれるほど (Bennet 1990: 245) 完成度の高い作品であるが、文学の分野からはもちろんのこと、語学の研究者からも注目を浴びてきた作品である。

本稿は、関連性理論の概念を援用することで「雨のなかの猫」を、Holmesland (1990) の要求に沿う形で²⁾、今まであまり取り上げられてこなかった新たな観点から分析できる可能性があることを示唆するものである。

まず、2節と3節で「推意」と「強い推意/弱い推意」について概説する。続く4節で「雨のなかの猫」のあらすじを紹介し、物語の最初に言及される‘cat’と最後に登場する‘big tortoise-shell cat’との同定可能性について考察する。5節はまとめである。

2 関連性理論における推意

推意 (implicature) はGrice (1975) によって導入された概念である。Griceの考え方の基本は実際に言語化されている部分から、言語化されていない非明示的な意味を量、質、関係、様態の4つの格率 (maxim) を用いて推論によって導き出すところにあり、そこでの推意は明示的に示されている「言われていること (what is said)」に対して「言われていないこと (what is not said)」にかかわる。

それに対して関連性理論では、推意に至る前段階においても推論が関与し、「言語化されている部分プラス α 」までが実質真理値が判断される対象となり、それを表意 (explicature) とした。すなわち、カバーするスコープと厳密さにおいてGriceのimplicatureの概念と区別される。たとえば、次期社長を話題にしている文脈で (1) のやりとりがなされたとしよう。

(1) Peter : I recommend Billy for the next president.

Mary : He is too young.

Maryの発話の推意は、たとえば、(2) のようなものとなる。

(2) a. I don't recommend Billy.

b. I don't agree with you.

Maryの発話で明示的に言語化されているのは 'He is too young.' のみであるが、実際に判断の根拠となっているのは (3) のようなものである。

(3) He is too young for the next president.

つまり、Griceでいう「言われていること」は 'He is too young.' であるのに対し、関連性理論では 'for the next president' を含む (3) が表意となり、そこに真偽判断が依拠することになる。

また、関連性理論では推意は最終的に得られる結論だけにとどまらない。次のやり取りをみよう。

(4) a. Can you go shopping in the afternoon?

b. I'm a bit busy today.

(4b) からは結局「行けない」という推意が導出されるが、言語化されている「忙しい」はその前提となっているので、Sperber and Wilson (1986/1995²) は 'If you are busy, you won't go shopping.' を推意前提 (implicated premise)、'I can't go.' を推意結論 (implicated conclusion) としている。

つまり、Griceでは実際に「言われていること」から4つの格率を駆使して「言われていないこと」を会話のなかで推意として導くことに特徴がある。他方、関連性理論では推意に至るまでのプロセスをより豊かにし、それを表意として明示的な側面に組み入れていることになる。

もうひとつこれからの議論に直接かかわるものとして、推意の却下可能性 (cancellability) に言及しておきたい。Griceは一般化された会話の推意 (generalized conversational implicature) はある場合 (in a particular case) 却下可能であると述べているが (Grice 1989 : 57)、却下可能性とは次のような発話に関係すると考えられている。

(5) a. Can you go shopping in the afternoon?

b. I'm a bit busy today, but I can spare a few minutes if you wish.

(5b) の前半部では「行けない」ということが推意として伝わるが後半部ではそれを「却下」して「行ける」可能性を述べている。このように、いったん伝えた推意をキャンセルできるということを Grice は推意の特徴のひとつとしてあげている。ただ、この特徴は、たとえば、意味の伴立性 (entailment) との対比を念頭においていた可能性が高い。すなわち、次の (6) ではビルの父親は [male] であることを伴立するが、父親が男性であること自体は却下することができない。

(6) Bill's father is a professor.

また、いわゆる尺度推意 (scalar implicature) にかかわる次のような発話では明示される数値以下の数値を伴立し、却下することはできない。(cf. Levinson 1983: 114-116)

(7) *Bill has three children, in fact two.

一方、(8a) は (8b) を推意する。

(8) a. Bill has three children.

b. Bill has only three children and no more.

ところが、この推意は以下のように却下することが可能である。

(9) A: How many children does Bill have?

B: He has three children all right. He has five in fact.

こういった発話が実際に生じる状況は、たとえば、3人以上子供がいれば児童手当が支給されるといった場合、支給要件「3人」が求められている情報とすれば、(9B) の前半部から出てくる推意 (8b) を否定している (9B) の後半部はごく普通に考えられる発話となろう。

しかしながら、次のやり取りを例に出すまでもなく、この却下可能性は推意に限らず「言われていること」全般に適用できる。

(10) A: Bill's father is a professor.

B: No, he's a lawyer.

Aの主張 'Bill's father is a professor.' は当然Bのように却下可能である。真理、科学的事実、歴史的事実、といったことはもちろん却下できないが、たとえそれが推意から出てくるものであっても却下不可能であろう。

つまり、却下可能性は上のような尺度推意がかかわる解釈には有効であるかもしれないが、推意一般をとりわけ特徴づけるものではないように思われるのである。

3 推意の強弱

Sperber and Wilson (1986/1995²) はさらに推意に強弱を仮定した。つまり、聞き手が高い可能性で導き出す推意とその可能性が低い推意とがあるということである。たとえば、「結婚を前提に交際したい」と言われた女性の返答として次のような言い方を考えてみよう。

(11) a. おつきあいしている方がいますので。

b. 今結婚のことは考えていません。

- c. そんなことを言われましても困ります。
- d. 少し考える時間をください。
- e. そんなことを言われるとは思っていませんでした。

たとえば、(11a) の推意前提として「交際している人がいれば別の人とは交際できない」といったようなことが考えられ、その推意結論、すなわち (11a) の推意は「交際できない」となる。

このように、(11a) はほぼ否定的な返答に近いものであるが、(11b) はやや将来への含みを残している点で (11a) よりは可能性を残していると言えるかもしれない。(11c) は発話者の困惑を表しており、(11d) は結論を出すまでに時間が必要である旨の発言であるが、いずれもyesかnoか判断しにくい。(11e) では驚きが表明されているが、それが肯定の答につながるのか否定の結論に至るのか不明である。聞き手がどちらの判断に傾くかは話し手・聞き手の固有の人間関係、周囲の状況等が関与するところとなるのである。

Sperber and Wilson (1986/1995²) は (11a) や (11b) では ‘No’ の返答が強く推意されているといい、他方、(11c~e) は ‘Yes’ あるいは ‘No’ が弱く推意されていると考える。また、強い推意は多くの聞き手が導き出すものであるが、弱い推意の場合は受け手によって異なる可能性が高いとする。すなわち、どの推意に到達するかは聞き手の責任に任されることが多くなるのである。

この推意の強弱という考え方はテキスト解釈に応用でき、たとえばサスペンスといった表現効果、プロットのどんでん返し (cf. Uchida 1998)、推理小説の伏線など、これまでは漠然とした説明しかできなかった概念に語用論から理論的にアプローチすることが可能であることを示唆するものである (cf. Sperber and Wilson 1986/1995², Wilson 2011, Pilkington 2000, 内田 2011)。以下でもこの概念を援用して議論を進める。

4 「雨のなかの猫」

この作品はイタリアに旅行中のアメリカ人の夫妻がおそらくあまり大きくないホテルに滞在しているときのエピソードを述べたものである。夫人が2階の部屋から雨が降っている外を眺めていると、テーブルの下でうずくまっている猫を見つける。かわいそうと思いそれをとりに行くが、実際に行ってみるとすでにいなくなっている。落胆して部屋に戻ってしばらくするとメイドが宿の主人からと言って大きな三毛猫をもってくる、という短編である。その間に夫とのあいだがどうやらうまくいっていないこと、夫人が好意を寄せる宿の主人が夫がもちあわせていないものを備えているらしいこと、「猫」がほしいと繰り返す夫人は現実の「猫」を超えたものを望んでいるのではないか、などがその行間に示唆されているといろいろな研究者が議論しているのはよく知られている。

なかでも最初に夫人が見た猫と最後にメイドがもってきた猫が同一であるのか否かについては結論が分かれている。議論は尽くされている感があるが、以下ではこの点に絞って新たな側面から考察していく。

4.1 猫のidentityについての解釈

アメリカ人の夫人が見つめて連れてこようとした猫の同定に関する主要な論考の整理は大沼（1987）に詳しい。それに基づいてまとめたものが（12）である。なお、Bennett（1990）とHolmesland（1990）、それに大沼（1991）を付け加えてある。

（12） 猫の同定	根拠
同一の猫：Baker 1952	特になし
違う猫：Hagopian 1962	なし
Stubbs 1983	big tortoise-shell catとkittyとの対照から
Carter 2008 ³⁾	big tortoise-shell catとkittyとは結びつかない
Bennett 1990	執筆時にモデルとなったと考えられる猫が二匹いたから
大沼 1991	（Lodge 1981に対して）視点は異なっているにもかかわらず全知の語り手による提示であるので
断定不能：Lodge 1981	kittyと言っている視点とbig tortoise-shell catと描写している視点が異なるので断定できない
Holmesland 1990	判断できない

Lodge（1981）は、Appendixの下線部5は夫、George⁴⁾の視点から描写されており、彼は妻の見た「雨のなかの猫」は直接見ていないゆえ、メイドがもってきた三毛猫がそれと同一のものかどうかはわからないと言う。もし、それが夫人の視点からの記述であれば次のようになるとする。

（13）‘Avanti,’ the wife said. She turned round from the window. In the doorway stood the maid. She held a big tortoise-shell cat ...

（13）の流れで不定冠詞aが使われていれば異なる猫であることが明らかとなり、その猫が夫人が見た猫と同一であれば定冠詞がくるはずであるとしている。（Lodge 1981: 15-16）つまり、原著のような提示の仕方では猫の同一性については断定できないということになる。

（12）をまとめると、Baker（1952）はその根拠をあげていないこと、また、Holmesland（1990）はほぼLodge（1981）の主張を踏襲していること、を考えると、対立軸は「異なるネコ」説対「断定不能」説という構図となる。「同一の猫」説は影が薄い。

4.2 猫のidentityと推意の強弱

2節で、推意（implicature）の却下可能性について触れた。つまり、却下可能性はGriceの会話の推意がもつ特徴のひとつであるが、その有効性と一般性については疑問符をつけた。今問題にしている猫の同一性ということに関連づけて述べれば、上の3つの解釈は推意であり、もしそれらからひとつの解釈を選択しようとする、ほかの解釈を却下することになるが、それぞれ何を基準にして退けるのか定かではない。つまり、どれを却下するかは恣意的な問題ということになる。（cf. 大沼1987: 85）⁵⁾ このことは3つの解釈のどれが作者の意図に近いのか、遠いのかということとは問えないという結論に至る。（文学的な解釈としてはこの3つの解釈はそれぞれ大きく異なる結論へと導かれるはずであるが。）

Appendixにあげてあるテキストで、下線部1の‘a cat’を受ける、下線部2の代名詞‘herself’

と 'she' に注目してみよう。この箇所は大沼 (1991) が詳しく取り上げており、他の箇所、たとえば、下線部 3 では it を用いているのに対し、下線部 4 で her が用いられているのは、現実の猫を指すものではなく、夫人の「願望の世界のなかに存在する猫の類 (class) の一構成員 (member) を指している」からであり、⁶⁾ それに対して、下線部 2 で言及されている猫は現実の猫であるので、「… 第 [2] パラグラフの女性代名詞形による指示の仕方は “perspective” を提供しているアメリカ女性のものではない、という感じを読む者に強く抱かせる」と述べている。(大沼1991: 55) つまり、下線部 2 の she は会話部である下線部 4 と異なり、「登場人物の視点を借りておこなわれる作者の叙述」のなかに現れる she であり、女性代名詞であるのは、「中性の代名詞で受けるのを通例とする名詞を女性代名詞で示す用法は、アメリカの男性に多いものである」(大沼1987: 92; cf. 大沼1991: 55-56) からとしている。さらに、つぎのように付け加えている。

(14) もちろん、問題のネコの性別がはっきりしていたり、女性名がついてそれが使われている文脈などでは “she” で指示する必要も生じてくるが、見てのとおり、ここでは、そうした問題の生じてくる余地はまったくない。(大沼1991: 56)

Bennett (1990: 251-252) も同じ個所を論じている。彼は下線部 1 の 'cat' を雌と同定しているのは作者の声 (authorial voice) であり、その猫を見た夫人は雌とは知らなかったが、無意識的にその猫に家庭に居場所のない自分を感情移入させていることが猫に女性形を用いている理由であることを示唆している。以下では、こういった大沼 (1991) と Bennett (1990) の見解に対し、雨のなかにいた猫を女性人称代名詞 'she'、'herself' で指示する必然性をまったく異なる視点から考えてみたい。

あまり知られていない事実かもしれないが、「三毛猫」は基本的に雌である。猫の雄、雌の染色体の構成は人間と同じく、それぞれ XY と XX と言われている。毛色は X 染色体で決まるので、XX の雌は 2 つの毛色の可能性があり、それに白が加われば「三毛猫」となるが、雄は X がひとつしかないで、まれになることはあっても (3 万匹に 1 匹の確率)、三色になる可能性は非常に少ないのである。また、仮に雄が生まれても「染色体異常」であるので繁殖能力はほとんどない。⁷⁾

おそらく、George の目からはっきりと「三毛猫」と判断された猫は「雌」であり、⁸⁾ 雨のなかにいた猫が、アメリカ女性の視点であろうと作者の視点からであろうと、それが「三毛猫」と判断されたのであれば女性代名詞の使用はなんの不思議もないのである。まだ暗くはなっていない時間設定でもあり、かつホテルの部屋は 2 階にあるので、当該の猫が三毛猫であるかどうかの識別は夫人にとってそう難しくはないと想像されることもこの仮説の傍証となろう。

さらに、作者 Hemingway は Key West の家で 30 匹以上の猫と暮らしていたとあり (http://user.xmission.com/~emailbox/cat_lovers.htm)、そういった猫好きの Hemingway が「三毛猫は雌である」ということを知っていた可能性はかなり高いと推察されるのである。

もし、この仮説が正しければ、(12) の問題提起の回答に多少なりとも影響を及ぼすことになる。つまり、同一の猫という解釈が息を吹き返してくるのである。あるいは、まったく同一の猫ではないとしても、雨のなかにいた猫も三毛猫であるという新しい解釈の可能性も生じてくる。それに伴い、しかるべき文学的解釈も必要となろう。

これを関連性理論の知見を借りて言えば、kittyとbig tortoise-shell catの対比などから得られる、「異なる猫」という解釈はいわば強い推意として提示され、他方、‘cat’を女性代名詞で指示していることがこの猫は三毛猫であることを弱いながらも推意していると言えるのである。強い推意はその方向に読者を意識させようとする作者の意図がはっきり読み取れるが、弱い推意はそれを採用するか否かはもっぱら読者の責任に任されている。また、仮に弱く推意された解釈が作者が意図したものであったなら、それに至るプロセスにはコストがかかるが、それに見合うだけの文脈効果をもたらされることも関連性の原理⁹⁾から説明できる。単に推意は却下できるというGriceの考え方ではそのことでなにを説明できるのかは不明であるが、推意の強弱という関連性理論の立場をとってはじめてその表現効果が説得的に説明可能となるのである。

5 結語

Ernest Hemingwayの短編、‘Cat in the Rain’は様々な観点から分析されており、その論点のひとつ、「雨のなかテーブルの下にうずくまっていた猫」と最後にメイドがもってきた三毛猫とが同一であるか否かについてもその論点は多岐にわたってきた。本稿では三毛猫の生理学的特徴を勘案することでその議論に新たな光を投げかけた。また、関連性理論の知見のひとつ、推意の強弱という概念を援用することで、(12)の3つの解釈には強弱があり、かつ、そこに作者の意図を汲み取ることが可能となることをみてきたことになる。¹⁰⁾

注

*本稿は退職記念講演「人称のダイクシスとその周辺」(2012年3月17日、ホテル日航奈良)の一部を加筆、修正したものである。その際、森岡裕一大阪大学大学院教授から貴重なアドバイスをいただき、かつ関連する文献をお教えいただいた。また、草稿段階で佐々木徹京都大学大学院教授からも有益なコメントをいただいた。お礼を申し上げます。

- 1) 詳しくはSperber and Wilson (1986/1995²⁾、Carston (2002) を、概説としては東森・吉村 (2003)、内田 (2011) などを参照されたい。
- 2) Holmesland (1990:60) は次のように述べている: ‘It is doubtful whether the enigma of the cat’s identity can be solved, considering the wealth of contradictory indices. The critic needs different criteria for explicating Hemingway’s method.’
- 3) これは1982年に出版された、R. Carter (ed.), *Language and Literature: An Introductory Reader in Stylistics*, London: George Allen & Unwinからの再掲である。
- 4) このfirst nameは‘Cat in the Rain’に出てくる唯一の固有名詞である。この‘George’は、夫人が部屋に戻りドアを開けたとき、‘She opened the door of the room. George was on the bed, reading.’のように導入される。ドアを開けて夫人の目に入ってくる人物は夫Georgeであり、そこにfirst nameを用いる必然性が存在する。呼称の用いられ方については内田 (2011: 122-126) を参照されたい。
- 5) 猫の同定をめぐっての推意の却下可能性についてはStubbs (1983: 209-210) にも言及がある。
- 6) ちなみに、下線部4の女性代名詞herは前述の‘a kitty’を受けけるものであるが、この猫は不定冠詞が付与されていることから、大沼 (1991) が指摘しているように、「実際の猫」ではなく、象徴的な「子ど

- も)、より特定的には、「女の子」を示唆するものとも考えられよう。(cf. Hagopian (1962))
- 7) この三毛猫の生理学的特異性についてはBennett (1990: 255-256, 487 (注)) も触れているが、先に述べたように、下線部1の女性人称代名詞の使用とは結びつけていない。
- 8) Smith (1989: 47) はメイドがもってきた三毛猫はその大きさからいって雄で、よって繁殖能力に欠けていると述べているが、雄である確率は低いと言わざるをえない。
- 9) 関連性の原理は次の二つからなる。(内田 2011: 19-20)
- (i) 第1原理 (認知原理)
人間の認知は、関連性が最大になるようにできている。
- (ii) 第2原理 (伝達原理)
すべての意図明示的伝達行為はそれ自身の最適な関連性の見込みを伝達する。
詳しくはSperber and Wilson (1995²)、Carston (2002)などを参照。
- 10) 4節で触れた様々な解釈もこの推意の強弱という点から再考可能であるが、稿を改めなければならない。

参考文献

- Bennett, Warren. 1990. 'The Poor Kitty and the Padrone and the Tortoise-shell Cat in "Cat in the Rain",' Benson, Jackson J. (ed.) *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*, Durham and London: Duke University Press, 245-256.
- Carston, Robyn. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Oxford: Blackwell. (内田聖二、西山佑司、武内道子、山崎英一、松井智子 (訳) 『思考と発話—明示的伝達の語用論』東京: 研究社 2008)
- Carter, Ronald. 2008. 'Style and Interpretation in Hemingway's "Cat in the Rain",' in Carter, Ronald and Peter Stockwell (eds), *The Language and Literature Reader*, Abingdon, Oxon: Routledge, 96-108.
- Grice, Paul. 1975. 'Logic and Conversation,' in Cole, Peter and Jerry L. Morgan, *Speech Acts* (Syntax and Semantics Volume 3), New York: Academic Press.
- Hagopian, John V. 1962. 'Symmetry in "Cat in the Rain",' *College English* 24, 220-222.
- Holmesland, Oddvar. 1990. 'Structuralism and Interpretation: Ernest Hemingway's "Cat in the Rain",' in Benson, Jackson J. (ed.) *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*, Durham and London: Duke University Press, 58-72.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lodge, David. 1980. 'Analysis and Interpretation of the Realist Text: A Pluralistic Approach to Ernest Hemingway's "Cat in the Rain",' *Poetics Today*, vol. 1: 4, 5-22.
- 大沼雅彦 1987 『『雨のなかの猫』の文法的一面』『日本語学』6: 11, 83-92.
- 大沼雅彦 1991 『『雨のなかの猫』の文法再論』『研究年報』(奈良女子大学文学部) 第34号 48-67.
- Pilkington, Adrian. 2000. *Poetic Effects: A Relevance Theory Perspective*, Amsterdam: John Benjamins.
- Smith, Paul. 1989. *A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*, Boston: G. K. Hall & Co.
- Sperber, Dan. and Deirdre Wilson. 1986/1995². *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell.
(内田聖二、中達俊明、宋南先、田中圭子 (訳) 1993/1999. 『関連性理論—伝達と認知—』東京: 研究社出版1993: 第2版1999)
- Stubbs, Michael. 1983. *Discourse Analysis: The Sociolinguistic Analysis of Natural Language*, Oxford: Basil Blackwell.

Uchida, Seiji. 1998. 'Text and Relevance,' in Carston, Robyn and Seiji Uchida (eds.), *Relevance Theory: Applications and Implications*, Amsterdam: John Benjamins, 161-178.

内田聖二 2011 『語用論の射程—語から談話・テキストへ』東京：研究社。

Wilson, Deirdre. 2011. 'Relevance and the Interpretation of Literary Works,' 吉村あき子、須賀あゆみ、山本尚子（編）『ことばを見つめて』東京：英宝社 3-19.

Wilson, Deirdre. and Dan Sperber. 1993. 'Linguistic Form and Relevance,' *Lingua* 90: 1/2, 1-26.

Appendix

CAT IN THE RAIN

THERE were only two Americans stopping at the hotel. They did not know any of the people they passed on the stairs on their way to and from their room. Their room was on the second floor facing the sea. It also faced the public garden and the war monument. There were big palms and green benches in the public garden. In the good weather there was always an artist with his easel. Artists liked the way the palms grew and the bright colors of the hotels facing the gardens and the sea. Italians came from a long way off to look up at the war monument. It was made of bronze and glistened in the rain. It was raining. The rain dripped from the palm trees. Water stood in pools on the gravel paths. The sea broke in a long line in the rain and slipped back down the beach to come up and break again in a long line in the rain. The motor cars were gone from the square by the war monument. Across the square in the doorway of the café a waiter stood looking out at the empty square.

The American wife stood at the window looking out. 1Outside right under their window a cat was crouched under one of the dripping green tables. 2The cat was trying to make herself so compact that she would not be dripped on. 'I'm going down and get that kitty,' the American wife said.

'I'll do it,' her husband offered from the bed.

3No, I'll get it. The poor kitty out trying to keep dry under a table.'

The husband went on reading, lying propped up with the two pillows at the foot of the bed.

'Don't get wet,' he said.

The wife went downstairs and the hotel owner stood up and bowed to her as she passed the office. His desk was at the far end of the office. He was an old man and very tall.

'Il piove,' the wife said. She liked the hotel-keeper.

'Si, si, Signora, brutto tempo. It's very bad weather.'

He stood behind his desk in the far end of the dim room. The wife liked him. She liked the deadly serious way he received any complaints. She liked his dignity. She liked the way he wanted to serve her. She liked the way he felt about being a hotel-keeper. She liked his old, heavy face and big hands.

Liking him she opened the door and looked out. It was raining harder. A man in a rubber cape was crossing the empty square to the café. The cat would be around to the right. Perhaps she could go along under the eaves. As she stood in the doorway an umbrella opened behind her. It was the maid who looked after their room.

'You must not get wet,' she smiled, speaking Italian. Of course, the hotel-keeper had sent her.

With the maid holding the umbrella over her, she walked along the gravel path until she was under their window. The table was there, washed bright green in the rain, but the cat was gone. She was suddenly disappointed. The maid looked up at her.

'Ha perduto qualche cosa, Signora?'

'There was a cat,' said the American girl.

'A cat?'

'Sì, il gatto.'

'A cat?' the maid laughed. 'A cat in the rain?'

'Yes,' she said, 'under the table.' Then, 'Oh, I wanted it so much. I wanted a kitty.'

When she talked English the maid's face tightened.

'Come, Signora,' she said. 'We must get back inside. You will be wet.'

'I suppose so,' said the American girl.

They went back along the gravel path and passed in the door. The maid stayed outside to close the umbrella. As the American girl passed the office, the padrone bowed from his desk. Something felt very small and tight inside the girl. The padrone made her feel very small and at the same time really important. She had a momentary feeling of being of supreme importance. She went on up the stairs. She opened the door of the room. George was on the bed, reading.

'Did you get the cat?' he asked, putting the book down.

'It was gone.'

'Wonder where it went to,' he said, resting his eyes from reading.

She sat down on the bed.

'I wanted it so much,' she said. 'I don't know why I wanted it so much. I wanted that poor kitty. It isn't any fun to be a poor kitty out in the rain.'

George was reading again.

She went over and sat in front of the mirror of the dressing table looking at herself with the hand glass. She studied her profile, first one side and then the other. Then she studied the back of her head and her neck. 'Don't you think it would be a good idea if I let my hair grow out?' she asked, looking at her profile again.

George looked up and saw the back of her neck, clipped close like a boy's.

'I like it the way it is.'

'I get so tired of it,' she said. 'I get so tired of looking like a boy.'

George shifted his position in the bed. He hadn't looked away from her since she started to speak.

'You look pretty darn nice,' he said.

She laid the mirror down on the dresser and went over to the window and looked out. It was getting dark.

'I want to pull my hair back tight and smooth and make a big knot at the back that I can feel,' she said.

'I want to have a kitty to sit on my lap and purr when I stroke her.'

'Yeah?' George said from the bed.

'And I want to eat at a table with my own silver and I want candles. And I want it to be spring and I want to brush my hair out in front of a mirror and I want a kitty and I want some new clothes.'

'Oh, shut up and get something to read,' George said. He was reading again.

His wife was looking out of the window. It was quite dark now and still raining in the palm trees.

'Anyway, I want a cat,' she said. 'I want a cat. I want a cat now. If I can't have long hair or any fun, I can

have a cat.'

George was not listening. He was reading his book. His wife looked out of the window where the light had come on in the square.

Someone knocked at the door.

'Avanti,' George said. He looked up from his book.

In the doorway stood the maid. She held a big tortoise-shell cat pressed tight against her and swung down against her body.

'Excuse me,' she said, 'the padrone asked me to bring this for the Signora.'

Summary

Relevance theory is a promising cognitive pragmatic theory and it covers a wide range of communication in general, including non-linguistic communication. Literary text is also within the scope of the theory.

'Cat in the Rain,' one of the best short stories of Hemingway's, has been discussed from various viewpoints both by literary critics and by linguists. Among a number of points in dispute is the issue whether the cat the American wife saw under the table in the rain was identical with the big tortoise-shell cat which was introduced at the final stage of the story.

The present paper considers the issue in terms of strong/weak implicatures in relevance theory, suggesting a novel approach to a possibility of determining the identity of the two cats.